

わたしの世界

藍色がお日様に染まる頃。

白い雲がそつとほどけるととき。

澄んだ緑と共に、わたしの世界が現れる。

朝露の香る、視界いっぱい茶畑。

街へ続く畦道。

煌めく小川。

ざわめく木々。

山道の先にある、

ふたりだけの木造校舎。

たくさんの本と、

元気いっぱいのコトハちゃん。

それから……

日の暮れる頃徘徊するオバケたち。

オバケたちっていうのは、他になんと呼んだらいいのかわからないから。

おばあちゃんが教えてくれたんだ。

山にも、畦道にも、茶草場にだって。

気をつけなきゃいけないものが、沢山あるんだよって。

分校に入学して、間もない頃だ。

茶草場というのは、茶畑の脇にひらけた自然の草地のことで、ササやスキたち風が風にゆらいでいる。

風鈴がゆれていた。

水音が氷みたいだなんて思った。

お日様も眩しかった。

扇風機が一生懸命銀糸のひらひらを靡かせている。

夏の日のことだった。

わたしは居間の畳に寝転がって、手袋の絵本を読んでいた。

絵本の中はすっかり寒そうで、毛糸の手袋に次々と潜り込む連中に胸をときめかせていたところだった。

「しーちゃん、おやつにせんか？」

台所からの嬉しい提案に、きつとわたしは目を輝かせていたことだろう。

実際、おばあちゃんが高そうな水ようかんを持って来て、口に手を当て驚いたのを覚えている。

水ようかんは艶やかな瑠璃色の硝子皿に鎮座していて、とらや

さんの高級なものに違いない。

そう信じて疑わなかった。

水風船模様のピッチャーから、よく冷えた深蒸し茶をコップに注ぐと、わたしとおばあちゃんはフォークでもって、水ようかんを切り崩した。

「なんじゃ、スーパーのヤツで十分じゃね」

「え？とらやさんのじゃないの？」

「とらや？　こりゃエーコープの特売品。昨日安かったから買ったのよ？」

お上品に小さく切って味わった一口目がバカみたいだ。

そうとわかれば、二口目はフォークを突き刺しかぶりつく。

口いっぱい、品のある甘さが瑞々しくほどけた。

「スーパーので十分だな！」

「しーちゃん、おばあちゃんの真似っこね？」

それから冷たいお茶を飲みながら、わたしはおばあちゃんの昔話に聞き入るのだ。

おばあちゃんは、毎日必ず、おやつの時間にお話を聞かせてくれる。

わたしは、このひとときが本当に好きだった。